



夕刊

発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-9511 電話 052(201)9811

2020年(令和2年)

8月19日(水)

一宮発 ウールジャパン

廃棄の羊毛買い取り製品化



原毛に着した「み」を確認して取り除く従業員。いずれも愛知県一宮市で

全国12牧場とメーカー提携

純国産の羊毛だけを使って生地を製品化するプロジェクトが進んでいる。中心となっているのは全国有数の毛織物産地、愛知県一宮市の毛織物メーカー「中外国島」の伊藤核太郎社長(右)。ほとんどが食肉向けで原毛は大半が捨てられているという国内牧羊業の現状に心を痛め「牧羊業に関わる人やサービスを増やし、マーケットを広げたい」と意気込む。

(宮井里恵、写真も)

「ジャパンウールプロジェクト」と銘打ち、今年1月、伊藤さんと、京都市で羊毛輸入業を営む本出ますみさん(左)、名古屋市守山区の毛刈り職人山本雪さん(中)が取り組み始めた。牧場に毛刈りの技術や選別、管理の知識を指導し、現在は捨てられている原毛を商



北海道の牧場でとれた羊毛で作った生地にする伊藤核太郎社長

品化した上で、同社が買い取り、生地を製品化する。

国内羊毛業の事情を知るため、伊藤さんが二〇一八年、北海道内の牧場を訪問。厳しい経営状況の中でも情熱を持ってヒツジを育てる人たちに会い「応援したい」とプロジェクトを思い立った。旧知の本出さんと相談し、道内の複数の牧羊場から羊毛を購入。試作を繰り返しながら、純国産のツイード生地を製作した。ジャケットを仕立てると、弾力のある原毛を生か

した厚みのある生地が昔ながらの素朴な風合いに仕上がった。

日本羊毛産業協会(大阪市)によると、国内の羊毛消費量の約七割はオーストラリア産メリノウールで、衣料向けは九割を超える。国内には約一万七千頭のヒツジがいるが、流通できるほどの羊毛が取れず、収益化できないため、廃棄処分されてきた。さらに、原毛には泥やゴミ、油が付着しており、商品化を困難にしているという課題もあった。プロジェクトでは毛が汚れにくい飼育方法も牧羊業者に伝授していく。伊藤さんは「原毛の買い取り先がなく捨てられていたため、普及していなかったノウハウを広めていきたい」と話す。

今年、北海道や宮城や高知県など全国十二カ所の牧場がプロジェクトに賛同し、中外国島に原毛を提供。同社は本年度、二つの購入を見込む。製品化した生地は、一宮市内の同社店舗や都内の百貨店など七カ所販売している。

伊藤さんは「牧羊業がもつかる仕組みを作る。日本にこんな素晴らしい羊毛を作っている人たちがいることを、商品を通じて消費者に伝えたい。生地を身に着けた人が誇りに思ってくれば」と願っている。

伊藤さんは「牧羊業がもつかる仕組みを作る。日本にこんな素晴らしい羊毛を作っている人たちがいることを、商品を通じて消費者に伝えたい。生地を身に着けた人が誇りに思ってくれば」と願っている。